4 月第 3 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 4 月 16 日（日）10：30－11：30　復活節第 2 主日
■説　教：　保科けい子 牧師
■説教題：「　心は燃えて　」
■聖　書：ルカによる福音書 24 章 28～35 節（新約 p161）
■讃美歌：57「ガリラヤの風かおる丘で」
　　532「やすかれ、わがこころよ、」

本日の箇所、ルカによる福音書24章28節から35節を読んでいく前に13節から27節で描かれている状況描写をご一緒に確認しておきたいと思います。主イエス・キリストが復活なさったイースターの日の昼間、二人の弟子たちが暗い顔をして、エルサレムから60スタディオン離れたエマオという村に向かって歩いていました。おおよそ、11キロメートルぐらいの距離になります。主イエスが十字架に架かって死なれ埋葬される前後、おそらくほとんどの弟子たちは自分たちも一味とみなされ捕らえられるのではないかという恐れから、蜘蛛の子を散らすようにあちらこちらへと散り散りばらばらに去ってしまったのではないかと思います。ここでの二人の弟子たちもまた、そのようにしてエマオへと急いでいたのでしょう。彼らはこの日の朝、仲間の婦人たちが主イエスの墓に行ってみると、埋葬されたはずの遺体が見当たらず、そこに天使が現れて、「主イエスは生きておられる」と告げたことを既に聞いていました。しかし、彼らは主イエスが生前に語っておられたはずの主イエスの復活ということを信じることはできませんでした。なぜなら、彼らは主イエスに対する期待を裏切られ、深い失望、落胆に陥ってしまったからです。その失望落胆の中で、彼らは今エルサレムを離れて行こうとしています。もうエルサレムにはいたくない、一刻も早くそこから出ていきたいという思いで、彼らは道を歩いているのです。それでも気にかかるので、エマオへの道すがら彼らはこれらの出来事について論じ合っていたのでしょう。そこに、復活なさった主イエスが近付いてきて一緒に歩いて行かれました。しかし「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」と16節にあります。二人の目が開かれるのは、本日の聖書箇所の31節になります。

そのような中で、主イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と彼らに問いかけました。主イエスのこの問いに答えて彼らは、主イエスに対して抱いていた希望とそれが裏切られ落胆してしまっている気持ちを語りました。それを聞いた主イエスは、救い主メシアは、苦しみを受け、それを通して栄光に入ることになっている、神様はそのような救いのご計画を預言者たちによって既に告げておられるではないか、あなたたちは、その出来事を自分の目で確かめたはずなのに、どうしてそれが分からないのか、とおっしゃいました。そして、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自

分について書かれていることを説明された」と27節にあるように、聖書のどこにどのような仕方で、主イエスによって成し遂げられる神様の救いのみ業が語られているのかを教えて下さったのだと思います。もちろん、ここで言われている聖書は旧約聖書ですが、その全体を通して、神様の救いのみ業が主イエスの受難を通して実現することが書かれている、と説き明かしてくださったのです。けれども、それで彼らの目が開かれて、目の前におられる方が復活した主イエスだと分かったわけではありません。彼らの目はなお遮られていたのです。しかし、後になって32節で、この時の彼らの心は燃えていたことが語られます。私たちもまた、このような経験をしているのではないでしょうか。私たちが本当に困難なことに出会って暗い顔で過ごしていた時、私たちの心が自分自身の苦しみや悩み、嘆きでいっぱいになり、周囲の何も見えなくなっていた時、まさに目が遮られていた時、たった一つの御言葉でも思い出すことができていたなら、私たちの傍らに主イエスがご自身を現わされていて、私たちの心が燃えていたのです。そして、その暗くて狭いところから抜け出す道を示されていたのです。

さて28節以下には、夕方になって彼らがエマオの村に着いた時のことが語られています。道々聖書を語ってくれたあの人はなおも先へと歩み続けようとしていました。二人はその人に、もう夕方だから自分たちと一緒にこの村に泊まるように勧めました。「無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた」と29節に語られています。彼らはこの人の語る聖書の話をもっと聞きたかったのです。そのようにして彼ら三人は夕食の席に着きました。その席で、主イエスが「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」のです。するとその時、「二人の目が開け、イエスだと分かった」のです。この話は、私たちが主イエスの復活を信じる者となることはどのようにして起るのかを記しています。私たちも、この二人の弟子と同じように、主イエスの復活をなかなか信じることができません。前述の話の繰り返しになりますが、彼らはその朝、仲間の婦人たちが主イエスの墓に行き、そこに主イエスの遺体がなかったこと、彼女たちに天使が現れて主イエスの復活を告げたことを知らされていました。けれども、それを信じることができなかったのです。そのように復活を信じることができない彼らの傍らに、主イエスご自身が現れて、共に歩み、聖書を説き明かして下さったのです。それは私たちにも起こることです。私たちがまだ主イエスを信じておらず、復活をも信じることができなかった時に、主イエスは共に歩んで下さり、聖書を説き明かして下さり、信仰へと導いて下さっていたのです。私たちは、そのことに後から気付くのです。また主イエスがパンを取り、祈ってそれを分け与えて下さった時にそれが主イエスであることが分かったというのは、私たちが礼拝において聖餐のパンと杯に与ることの中で、復活して生きておられる主イエスとの出会いと交わりを経験していくことと重なります。礼拝において聖書の説き明かしを聞き、聖餐に与ることの中でこそ、私たちの遮られていた目が開かれ、復活して今も生きておられる主イエスとの交わりに生きる者とされるのだということをこの話は示しているのです。よく言われることですが、ここで起

こっている出来事こそ、私たちの礼拝においてなされている聖餐式であるというのです。そのように、私たちのプロテスタント教会は、16世紀からずっと確信してきました。御言葉の説教と聖礼典を正しく行うところに主の御体なる教会が存在する、そのようにこれからも確信し続けていくはずです。

二人の弟子たちは、復活された主イエスの姿が見えなくなった時を移さず出発して、エルサレムへと引き返し、使徒たち十一人とその仲間に「道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。」のです。マタイによる福音書やマルコによる福音書は、復活なさった主イエスは、かつて生前の主イエスが宣教を始められた遠く離れたガリラヤで弟子たちに現れると記していますが、ルカによる福音書はエルサレム周辺のエマオでそしてエルサレムで、復活された主イエスが現れたことを伝えています。そこから、ルカによる福音書と同じ著者による使徒言行録で描かれるペンテコステの出来事へと続き、エルサレムから教会の伝道が始まり、全世界へと広まっていく道筋が見えているのです。そのような道筋が今もなおつながっているこの礼拝において、私たちは本当にお互いの心が燃えているような時を共有しているはずなのです。そのことがまさに起こっているからこそ、私たちは力を与えられてこの世に出ていくことができるのです。